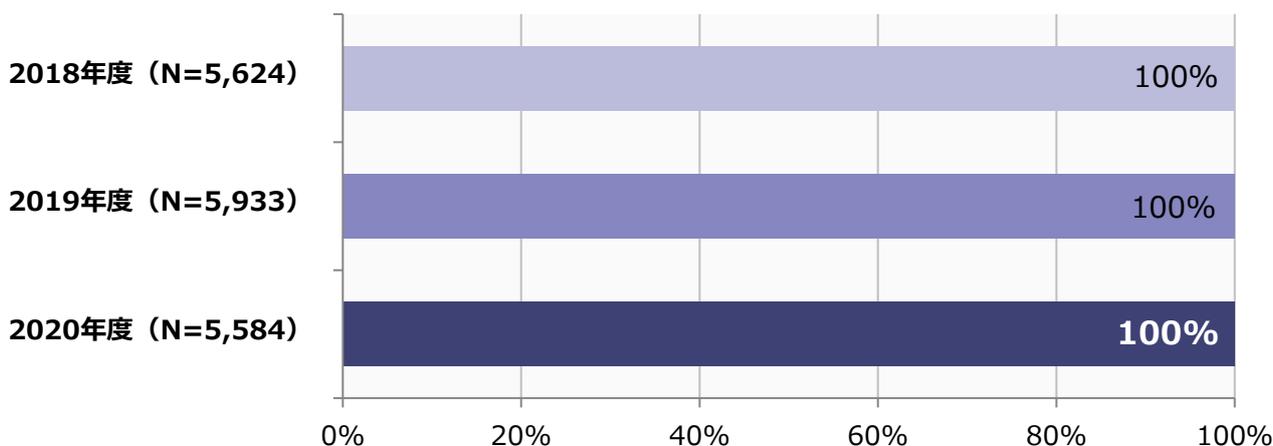


細胞診標本のダブルチェック

病理診断の重要な分野である細胞診断における精度管理の状況を示す指標であります。

この指標の高い数値を維持することは、単に診断報告書の精度の向上だけではなく、検体の採取、標本作製、鏡検、報告、報告書の管理や病理組織診断の整合性の検証も含め一連の細胞診業務が複数の専門家の相互確認により的確に実施されていることを意味します。

当院の病理診断科は日本臨床細胞学会の細胞検査士認定精度また細胞診専門医制度において、それぞれ日本臨床細胞学会認定施設および教育研修施設になっており、これらの認定更新のために定期的に業務内容の確認、資格保持者の維持や技量の向上に関する取り組み、そして外部サーベイラインスへの参加を継続しています。適切に検査室の運営、精度管理が維持され、また教育研修活動も重視されていることを担保する指標と言えます。



当院値の定義・算出方法

分子： 細胞診を実施した件数

分母： 細胞診標本を2名以上の細胞検査士あるいは細胞診専門医が鏡検したのちに最終報告を行った件数

×100 (%)

※グラフ中のN数は分母の値を示している。

結果の考察と今後の取り組み

例年通り100%の達成率が可能でありました。細胞診業務が順調に遂行され精度管理も行われていると言えます。高い達成率の維持のためには、練度の高い複数の細胞検査士が診断業務に携わる必要がありますが、近年はROSE (rapid on-site evaluation)と言われる臨床検査現場に立ち会う様式での判定業務も増加しており、検査室内でも細胞診だけではなく臨床検査技師としての業務も質、量ともに増大傾向にあります。一方では働き方改革との整合性も求められており、より業務の効率化を図る必要があります。引き続き高い業務水準を維持出来るよう、業務環境の整備、スタッフの育成、あるいはスタッフ個人の生涯的な教育研修に努めていく必要があります。細胞診の分野でもゲノム医療に資する検体の提出も増加しており、医師、技師とも最新の動向に注視しながら、院内の各部署とも連携の上、新しい業務内容にも適応していく必要があると考えています。

文責：病理診断科主任部長
加藤 誠也